

昨年60歳になった某モータースの社長がいた。有望企業にのし上がっていた矢先、普段から「体調があまり良くない」と漏らしていたが、仕事好きで多少無理をしても仕事をしていると、病の方が遠慮して退散していくと言うモータースな社長だった。

ところが、長い間の無理が重なって大事な仕事の途中で入院し、2日後に急死された。後に残った家族・従業員の人達は、社長に頼り切っていたため、荒海で舟の舵を失ったようなもので、その悲歎は言いようもなかった。「もっと体を大事にしておれば良かったのに、今日の不況を乗り切るため、せめてあと半年ばかり」と嘆かずにはおれない心情はやむを得ないでしょう。

しかし、それは悲しくも後に残った者の繰言。当人は成すべきことを全て成し遂げて逝かれたのです。しかも当人は黙って死という事実を引き受けて一生を終わっていったのです。それに引きかえ、逝った人に過重なことを押し付けている己の我がままに気付こうともしない悲しくも愚かな我が身である。

「花が散って惜しむのは、眺めている人の我がままだ」

花に何の責任があるだろうか。世の中の一切の不足なし。ちょうどよい。ものごとはそれぞれ自体満足。時熟して生じ、時熟して滅す。ただこの実相に目覚めることが大切である。

自分の我がまま気ままで、目の前の現象を見たり聞いたり受け止めたりして、あたかもそれが当然のこととしている。この悲しい現実そのものに目覚めよと呼びかけ、呼び覚まされ、尽十方無碍光、輝く世界に出会うた感嘆こそ、今の南無阿弥陀仏である。

「焚くほどは、風にくれたる落葉かな」

このすばらしい世界に気付かず、不足不満をまき散らしていた私が落葉ではなかろうかと思えます。